アイヤーム・アハリー
Ayyam Ahli / Days of "Ahli"
2024 年 11 月 25 日 No. 46

**アハリー・アラブ病院を支援しよう！
即時停戦！ガザ解放！
パレスチナと共に！**

アハリー・アラブ病院を支援する会　共同代表　村山盛忠・藤田　進
169-0051　東京都新宿区西早稲田 2-3-18　キリスト教事業所連帯合同労働組合気付 MAIL : ayyam_ahli@yahoo.co.jp

アハリー・アラブ病院を支援する会ニュース・レター

パレスチナの人びとを決して忘れない

2023 年 10 月に戦闘が始まってから 1 年以上が経過し、ガザの状況は地獄絵図が拡大しています。特にこの 1 ヶ月はアハリー・アラブ病院のある北部が集中的に攻撃され、先日も病院のすぐ近くで爆撃があり、大勢の負傷者が運ばれている様子が SNS に上げられていました。爆撃され破壊された建物を掘り返すことも出来なくなっており、埋葬する場所すらないため、飛び散った遺体の破片を拾い集めて袋に入れて持ち歩くしかない状況です。また、イスラエル軍は支援物資をわざと爆撃しています。ガザの飢餓が進行しています。アハリー・アラブ病院は再び攻撃されるかもしれない危険と隣り合わせの中、ガザの人びとのために活動しています。皆さま、引き続き、ご支援をお願い申し上げます。

スハイラ院長からのメール　2024 年 11 月 13 日受信

↑再建された病院のエントランス

皆さんの共感と温かいお気持ちに感謝いたします。

ガザの状況はまさにあまりにも深刻です。爆撃はやむことなく、何の罪もない人々が瓦礫に埋まって死んでいき、多くが家を失い、負傷に耐えています。ガザがどうなるか誰もわかりません。イスラエル軍の計画は不吉の極みです。北部ジャバーリヤー、ベイト・ハヌーン、ベイト・ラーヒヤーの避難所や住宅を恐ろしいまでに爆撃し、パレスチナ人を一人残らず追放すると言っています。安全なところなどありません。ガザではジェノサイド戦争が吹き荒れています。いわゆる「自由世界」は、21 世紀最大のジェノサイド殺戮を静かに見守っています。

絶望的な状況ですが、違う明日があると私は確信しています。

いつかガザに自由の太陽が昇り、涙の川は止まるでしょう。私たちの悲しみは喜びに変わり、苦しみは幸せに変わるでしょう。この戦争は終わり、平和と正義がガザと中東全域に満ちるでしょう。

あなたがたの連帯をいまいちど感謝し、ガザに癒しを捧げるアハリー・アラブ病院の使命をこれまでもこれからも助けてくださることを感謝します。

心を込めて

スハイラ・タラズィ　アハリー・アラブ病院院長

キリスト教シオニズムとは何か

大宮有博（おおみやともひろ）

通信編集者から私に与えられた課題は、ネタニヤフの戦争と第二次トランプ政権を念頭に置いて、アメリカのシオニズムを解説するようにというものでした。やや歴史的な説明をしていこうと思います。

■キリスト教シオニズム

キリスト教シオニズムを、ベツレヘムの神学者ミチリ・ラヘブは、次のように定義しています。

> メタ物語*のなかに聖書的・神学的に作り出された聖書的・神学的構成概念を用いて、グローバルな視野を巻き込みながら、パレスチナにおけるユダヤ人入植者植民地主義を支援するキリスト教ロビー団体。

このラヘブの定義は、キリスト教シオニズムが、ディスペンセーショナリズム（後述）と結びついて白人福音派の間で広まっているものだけでなく、ペンテコステ・カリスマ運動と結びついて世界に広まっていること、そして、聖書的・神学的な構成概念を通して、リベラルなキリスト教の間にも広まったことを示そうとしています。

これは念をおさなければならないことですが、キリスト教シオニズムのほうが、ユダヤ人のシオニズムに先行してあったということです。ヨーロッパ・キリスト教の文献をひも解けば、ユダヤ人国家の建設を期待する考えは、かなり前から存在しました。はっきりとした形となったのは、19世紀のイギリスです。20世紀後半に、アメリカで宗教右派の争点の一つとなり、今ではアジアやアフリカ（日本にも！）のキリスト教の間にも自国の入植者植民地を肯定するものとして入り込んでいます。

ラヘブの定義に「メタ物語のなかに聖書的・神学的に作り出された聖書的神学的構成概念を用いて……」とあります。こなれた日本語訳になっていないので、少し解説をします。聖書では、エジプトを脱出してカナンの地に侵入した部族連合（後に連合王国）のことを、さらに厳密には「北イスラエル王国」のことを、「イスラエル」と呼んでいます。「イスラエルの子ら」は、そこから「神に選ばれた民」と言うわけです。1948年に建国宣言をした「イスラエル」は、それにちなんでつけられた国名であって、聖書のイスラエルと同一の国でもなければ、その延長線上にある国でもありません。ですがキリスト者の多くは、聖書のイスラエルと1948年建国のイスラエルを同一視してしまっています。そして、聖書のヨシュア記に重ねて、〈カナンの地（パレスチナ）＝イスラエルに約束された地〉、〈先住民＝悪、野蛮、駆逐されて当然の民〉と見てしまっています。

そもそも出エジプトが新共同訳聖書の後ろにある地図２のとおりでないことは言うまでもありません。更に、カナンへの定住を示す地図３は、まるでイスラエルの12部族が定住する前はその地は無人であったかのような印象を与えます。また、イスラエルと名乗る民も外から来たというよりも、カナンの民のなかから起こったと考えられています。種々雑多な民が先住していたことを示す地図こそ、本来は聖書の巻末にあるべきです。シオニストが作ったメタ物語に、聖書や神学の言葉で肉づけしてしまうことが、キリスト教シオニズムであると、ここでラヘブは主張しているのです。

＊メタ物語＝フィクションとわかっていることを、更に物語っていくこと。

■ディスペンセーショナル・キリスト教シオニズム

80年代に台頭したアメリカ宗教右派が、白人福音派を取り込むための論点の一つとしてあげてきたのが、イスラエル支持です。これは福音派全体に浸透しているディスペンセーショナリズムと密接に関係しています。ディスペンセーショナリズムとは、世界の歴史を7つの「ディスペンセーション（神の采配）」と呼ばれる段階に分けて捉えます。その段階は、①無垢の時代（堕罪する前、エデンの園の時代）、②良心の時代（アダム～ノア）、③人間による統治の時代（ノア～アブラハム）、④約束の時代（アブラハム～モーセ）、⑤律法の時代（モーセ～キリスト）、⑥恵みの時代あるいは教会の時代（使徒言行録の時代～最後の審判）、⑦御国の時代（キリストの再臨をもって始まる千年王国）です。そして、私たちは、⑥恵みの時代、すなわち終わりの時代を生きており、キリストはかなり近い将来やってくると考えます。ですからキリスト者は、互いに争う諸国を一掃する神の国の到来を待つように勧められます。

19世紀終わりにディスペンセーショナリズムを提唱したジョン・ダービーは、ユダヤ人を聖地に帰還させれば、世界最終戦争が起き、キリストが再臨し、ユダヤ人の一部はイエスをメシアとして認め、認めなかったユダヤ人は滅びる、と主張しました。また、ディスペンセーショナリズムを受け入れる福音派は、イスラエルが最終的にユダヤ人国家としてパレスチナに樹立され、先住していたパレスチナ人をその地から追い詰め、周辺アラブ諸国に勝利する姿こそが、再臨が近づいているしるしと考えています。

この考えに基づいてジョン・ヘイギーらが組織したのが、ロビー団体「イスラエルのためのキリスト者連合」（CUFI）です。この団体には、イスラエル・ロビーのAIPAC（アメリカ・イスラエル公共問題委員会）も一目置いています。

■アメリカにおけるキリスト教シオニズムの起点（1967年）

イスラエルが1948年に独立宣言をした時、キリスト教のなかでユダヤ人国家をパレスチナに建設することを求めるキリスト教シオニズムの中心は、アメリカではなくイギリスでした。ところが、1967年の第三次中東戦争でのイスラエル勝利をきっかけに、キリスト教シオニズムの軸が、アメリカに移りました。第三次中東戦争に勝利したイスラエルは、その領土を大きく広げました。他方で、ベトナム戦争の敗北が濃厚になっていたアメリカでは、福音派の大衆伝道家たちが、イスラエルの勝利について、イスラエルが神に選ばれた民であり、パレスチナが彼らに約束された地であることの証であると主張しました。そして、この勝利を、ディスペンセーショナリズムと結びつけて、キリストの再臨が近づいているしるしと捉えました。

それに対して、アメリカのベトナム戦争敗北は、神に選ばれたはずの国が無神論の共産主義との戦いに負けたことを意味していました。福音派の大衆伝道家たちは、この敗北の原因として、アメリカが60年代に公立学校での祈りをやめたりするなど、リベラルな政策を推し進めたためであると主張し、アメリカ国民に「悔い改め」を求めました。

例えば福音派の説教者ビリー・グラハムは、早々とイスラエル支持を打ち出し、70年に「His Land」という映画まで作りました。彼は1973年に、イスラエルのメイア首相に、イスラエルは聖書の預言の成就と認（したた）める短い手紙を送っています。

■イスラエル大使館のエルサレム移設（2018年）

2018年5月の在イスラエル・アメリカ大使館のエルサレム移設は、キリスト教シオニストの勝利とも言えます。この背景には、シオニスト支持者でカジノ王シェドニー・アデルソンと、第一次トランプ政権にホワイトハウスに自由に出入りすることを許されていた宗

教右派のリーダーたちの暗躍があったと言われています。移設のセレモニーで、キリスト教シオニストのジョン・ヘイギーとロバート・ジェフレスが祈りをささげています。このセレモニーの後、ネタニヤフはこの２人と会見し、ラテンアメリカの国々が大使館をエルサレムに移設するように、ロビー活動を展開するように要請しています。

私が注目するのは、この移設に先立って行われたペンス副大統領（当時）のイスラエル国会での演説です。ペンスは、白人福音派のモデルのような人で、宗教右派をトランプ支持に固めるために副大統領に指名されたような人物です。彼の演説の一部を引用します。

> わが国の最初の入植者たちもまた、自分たちを摂理によって遣わされた巡礼者であり、新しい約束の地を築くために来たのだと考えていました。イスラエルの民の歌と物語が彼らの賛歌であり、彼らはそれを子どもたちに忠実に教え、今日に至っている。そして私たちの建国者たちは、他の人たちも言っているように、ヘブライ語聖書の知恵に方向づけられ、導かれ、インスピレーションをうけた。（2018 年 1 月 22 日）

これほどきれいに白人キリスト教ナショナリズムとキリスト教シオニズムを重ねた演説を私は聞いたことがありません。この演説の全文は CUFI のホームページに掲載されています。おそらく、この演説はキリスト教シオニストたちにとって、党綱要のように響いたのでしょう。

ペンスがここで示したアメリカ建国のメタ物語は、白人キリスト者の記憶であり、その記憶から先住民が駆逐されたことも、アフリカからたくさんの人々が奴隷として連れてこられたことも、神の摂理というお題目のもとに、完全に消されています。こういう復古調の歴史観は、白人福音派の特徴である、白人キリスト教ナショナリズム（white Christian nationalism）と言えます。

ネタニヤフが翌々月に、トランプと会見した後に行った記者会見演説は、この演説の脇句とも言えます。

> ユダヤ人は長い記憶力を持っているので、2500 年前の偉大な王、ペルシャ王キュロス大王の宣言を覚えています。彼は、バビロンに追放されたユダヤ人が戻ってきて、エルサレムに私たちの神殿を再建することができると宣言した。私たちは、百年前にバルフォア公が、祖先の故郷におけるユダヤ人の権利を認めるバルフォア宣言を発表したことを覚えている。我々は 70 年前、ハリー・S・トルーマン大統領がユダヤ国家を承認した最初の指導者であったことを覚えている。 そして数週間前、ドナルド・J・トランプ大統領がエルサレムをイスラエルの首都として承認したことを覚えています。 大統領、このことは時代を超えて私たちの国民に記憶されることでしょう。（2018 年 3 月）

ペルシアの王キュロスを救世主とする観点は、旧約聖書に見られます（歴代誌下 36:22-23; エズラ記 1:1-2; イザヤ 44:28; 45:1［キュロス＝油注がれた者］）。これは白人福音派のみならず、リベラル層にも広まっているキリスト教シオニズムを意識してのことでしょう。

ペンスとネタニヤフの演説の引用からわかることは、アメリカとイスラエルが互いに聖書の言葉を用いることで、互いの入植者植民地主義を正当化していることです。そして、宗教右派寄りだった第一次トランプ政権とネタニヤフ政権の蜜月関係が、ここに言い表されています。

第二次トランプ政権も、第一次ほど宗教右派寄りではなくても、白人ナショナリズムに後押しされて奪取した政権ですから、同じ入植者植民地主義のネタニヤフ政権を引き続き支援するのでしょう。

■イスラエルによるガザ侵攻（2023 年）

2023 年 10 月のハマス攻撃を口実としたイ

スラエルのガザ侵攻が始まると、キリスト教シオニスト（宗教右派）の動きが目立つようになります。 2023年12月には、フランクリン・グラハムがイスラエルを訪問し、ネタニヤフと会見しました。ちなみに同じ時期に、駐日イスラエル大使館に日本人牧師15人が訪問し、イスラエル支持を表明しています。

2024年5月には米国聖公会が、7月には米国長老教会（PC（USA））がキリスト教シオニズムとの決別を宣言しました。また、このころ各地の大学キャンパスで、学生によるイスラエルの攻撃を批判する行動が拡大しました。学生による行動は、大学財団が持つイスラエル国債売却や、イスラエル支援企業からの資金引き上げを要求するものでした。

このタイミングでネタニヤフがアメリカを訪問しました（7月）。これは共和党で下院議長マイク・ジョンソンが根回しをして実現したものです。彼はいわゆる白人宗教右派に支援され、親イスラエルでも有名です。ネタニヤフは訪米初日に、宗教右派指導者（キリスト教シオニスト）たちと会食しています。バイデンやハリス、トランプに会ったのは、この会食の後です。この会食は、バイデン政権下で、アメリカ政府とネタニヤフ政権を結びつける力が宗教右派であることを如実に示しています。

■わたしたちがなすべきこと

トランプは政治家ではなく、経営者・投資家です。ウクライナもイスラエルも、彼の頭の計画では投資先です。利益のある「支援」しかしません。イスラエル・ロビーや宗教右派の選挙協力の論功行賞は2016年の選挙の時ほどではないにしても、やはりあるでしょう。これまで以上の武器がイスラエルに流れるでしょう。私たちは何をすればいいのか。

第一に、BDS（Boycott, Divestment, and Sanctions）は一定の成果があるようです。イスラエルは特にD（投資引き上げ）を警戒しています。来年になると、アメリカでは、BDSが反ユダヤ主義として、制限されるでしょう（この点はハリスが勝っても同じ）。そこで、日本版BDSや、今のBDSをアップグレードした新しい作戦を練る必要があります。皆さんの関係する年金や企業、法人は、イスラエル国債を持っていたり、イスラエル関連企業に投資していませんか。

第二に、トランプもその支援者も、反国連一色です。UNRWAだけでなく、UNESCOやUNICEFといった機関から、アメリカが手を引く可能性があります。日本政府がその動きにならわないように、政府を監視する必要があります。

第三に、キリスト教シオニズムの影響力を抑えることは、言うまでもなくキリスト者――福音派のみならずリベラルだと思っている人も――の責任です。教会学校やキリスト教学校の教師や説教者は、知らないうちに（あるいは勉強不足から）教案や説教にシオニズムを正当化するものを交えていないか、現在の歴史学や考古学に照らして点検する必要があります。米国長老教会や米国聖公会のように、日本でも、各教派、日本聖書協会、キリスト教出版社、エキュメニカル団体が、キリスト教シオニズムとの決別を表明すべきです。なお、米国長老教会の「キリスト教シオニズムへの加担の告白について」は、日本基督教団公式ホームページにアップされています（本紙6pに和訳掲載）。

最後に、今ある支援をさらに太くすることです。アハリー・アラブ病院の支援の継続・拡大は言うまでもありません。

（関西学院大学教員／聖書学）

【参考文献】

Raheb, Mitri. *Decolonizing Palesinte: The Land, the People, the Bible*. Maryknoll: Orbis, 2023.
Lewis, Donald M. *A Short History of Christian Zionism: From the Reformation to the Twenty-First Century. Lisle:* IVP Academic, 2021.

キリスト教シオニズムへの加担の告白について
On Confessing our Complicity in Christian Zionism

PCUSA（米国長老教会）第 226 回総会 (2024 年) において、総意により承認 [INT-05] 号
Approved by the PCUSA 226th General Assembly (2024), by consensus

2004 年に承認されたクリスチャン・シオニズムに立ち向かう決議を更新し、拡大する。具体的には、神学・編成・伝道局を通じて総会に対し、以下のことを呼びかける。

A. あらゆる形態のクリスチャン・シオニズムを拒絶する。
1. 付録 A - 2004 年のクリスチャン・シオニズムの拒絶に関する決議を参照。
2. あらゆる形態のクリスチャン・シオニズムの拡大している事実を認めること。

B. PCUSA の 2004 年の方針以来のクリスチャン・シオニズムの拡大について、以下の事柄を含めて論じる研究文書を発行する。
1. 2004 年以降のイスラエルとパレスチナに関する総会決議の記録を提供する。
2. 2004 年の決議以来、クリスチャン・シオニズムの危険性がどのように拡大されてきたか、特に以下の事項を取り上げる。
   a. キリスト教が、聖書の「約束の地」に関する聖書の見解とイスラエル国家を、暗黙のうちに、時には明示的に結びつけている方法
   b. イスラエルを聖書に記された王国としての単純に焦点を当てるキリスト教シオニズムの世界的な広がりおよび採用
   c. 紛争や占領ではなく、〈発見の教義〉言及した入植者植民地主義に対する理解の増大。これは、キリスト教シオニズムとのつながりに気づかないまま、主流派のキリスト教徒や他の信仰を持つ人々がそれに加担してしまうあり方を示している。
3. 土地の奪取と先住民族の強制退去を正当化するイデオロギーを、イエスの教えと模範に基づいて拒絶し、十戒に基づく聖書の神学を指し示し、世界人権宣言に合致する、隣人愛と尊敬の倫理を支持する。出エジプト記 20:17 は、「隣人の家を欲してはならない。隣人の妻、男女の奴隷、牛とろばなど隣人のものを一切欲してはならない」ことを明らかにしている。
4. PCUSA は典礼と教育を通じて、聖書のイスラエルと現代のイスラエル国家との間の基本的な区別を明確にし、両者の混同を避け、また、歴史的ユダヤ・シオニズムとは異なる、クリスチャン・シオニズムとして一般に知られている宗教的イデオロギーの有害な影響を助長するような混乱を減らすことを約束する。

C. 総会に対し、キリスト教シオニズムの広がりにそれぞれの文脈で対抗し、経験と資源を分かち合う空間を作っている世界中のパートナーと協力するよう、世界宣教局を通じて呼びかける。これには、キリスト教シオニズムが広がっている米国、アフリカ、アジアのパートナーと共にイベントを開催することが含まれる。

D. パレスチナとイスラエルのすべての人々のための完全かつ平等な人権を伴う公正な平和を提唱するよう、信仰を持つ人々に呼びかける。

※日本基督教団 HP から転載　ホームページでは英文・日本語の PDF がダウンロードできます。

死の搾取 イスラエルによる臓器摘出の疑惑が消えない理由

https://researchcentre.trtworld.com/featured/perspectives/deadly-exploitation-israel-and-the-persistent-claims-of-organ-harvesting/

2024年9月27日　TRTワールドリサーチセンター　**Çağdaş Yüksel**

イスラエルがパレスチナ人に強いている戦争はしばしば軍事作戦、領土紛争、政治的行き詰まりという観点から考察される。しかし、こうした出来事の後ろに見え隠れするのは、弾圧された人々の衰弱した身体が臓器取引業界の商品になるという、さらに暗黒な側面だ。

イスラエルが拘束したパレスチナ人や戦争犠牲者から摘出した臓器を国際市場に提供している、もしくはイスラエルは臓器移植ツーリズムの中心地になったという指摘がされるようになって久しい。指摘は紛争の最中にだけされるわけではない。この指摘は戦闘が起きていない平穏時でさえパレスチナ人の身体が商品化されていることを示唆しており、パレスチナで現在進行中の人権侵害についてもこのような恐ろしく不快な一面がありうるという視点を加えている。

紛争地における臓器売買は新しい現象ではない。法が崩壊し、人命の価値が損なわれる戦地は、違法な活動の温床となる。戦死者の臓器摘出はバルカン半島諸国やサハラ以南のアフリカを含め、世界中の紛争地で記録されてきた。国連人権条約とジュネーブ諸条約はそれを受け、紛争地の民間人を保護するための明確な規則を打ち立てた。しかしながらイスラエルは、1949年のジュネーブ第四条約には批准していない。死者に対する尊厳を義務付け、遺体の略奪や損壊を禁じた条約である。

イスラエルがこれら国際的な義務を回避していることに加えて、臓器移植に関する倫理的宗教的な違いが議論に拍車をかけている。ユダヤ教の教えである「ピクァハ・ネフェシュ」は救命の重要性を説いているが、イスラエルのとりわけ正統派のユダヤ教徒は脳死はひとの死ではないとして臓器の提供を拒否している。その結果、イスラエルの臓器提供率は低いままだ。西洋ではほぼ30%の人が臓器提供カードを所持しているが、イスラエルでは14%前後の数値にとどまる。このギャップが、イスラエル人は外国まで行って臓器移植をおこなっている、パレスチナ人の臓器が狙われているとする主張を促進している。

イスラエルが臓器取引をしているという告発が最初に現れたのは、1980年代後半から90年代前半にかけた第一次インティファーダの時だ。この時期、多くのパレスチナ人家族が、イスラエル軍に殺され持ち去られた親戚の遺体が臓器のない状態で戻されたと申し立てた。当初は根拠のないプロパガンダとして無視されたが、事例が増えるにつれ疑惑は深まっていった。スウェーデンの新聞Aftonbladetは2009年、1992年にイスラエル兵に殺されたパレスチナ人の若者ビラール・アフマド・ガーニムのケースを取り上げ、「私たちの息子の臓器は盗まれた」と題して、イスラエルによる臓器取引の疑惑に光を当てる記事を掲載した。イスラエルが亡くなったパレスチナ人の臓器を摘出していると主張する家族へのインタビューが掲載され、より広範な臓器売買ネットワークがイスラエルの医療施設とつながりがあることを示唆した。

イスラエルの政府関係者は以前から、パレスチナ人などの身体の一部を切除していることを認めていた。2014年にはイスラエルのテレビ番組で、イスラエル兵のやけど治療のために、亡くなったパレスチナ人とアフリカ人労働者の皮膚を採取しているとイスラエルの高官が告白し物議をかもした。イスラエルの皮膚バンクの代表は、イスラエルが保有する人間の皮膚は17平方メートルに達したことを明かしている。イスラエルの人口にしては大量であり、臓器の収集行為が拡大していることを示唆するものだ。

イスラエル人医師で人類学者のメイラ・ワイスは、著作*Over Their Dead Bodies*（『屍を超えて』）（2002）で、イスラエルの大学における医学研究およびイスラエル人患者への移植を目的としたパレスチナ人の臓器摘出が組織的におこなわれているとし、その詳細を紹介した。

「欧州地中海人権モニター」は2023年10月の

報告で、イスラエルに拘束され返却されたパレスチナ人の遺体に凌辱された兆候があったとして、パレスチナ人の臓器摘出についての懸念を呼び覚ました。ガザの保健当局も返却された遺体から臓器が摘出されていたとして、遺体の改変を報告している。

同報告によると、イスラエル軍はガザ北部の病院から数十体の遺体を持ち去り、切断した状態で戻した。イスラエルのハアレツ紙は2024年7月、イスラエル軍がスデ・テイマン刑務所にパレスチナ人の遺体1500体を保管していると報じている。このような指摘はすべて、戦死者の尊厳、今よりさらに広い範囲の人権侵害について迅速に調べる必要性を強く示している。

イスラエルは長いこと臓器ツーリズムの行先としても批判されている。欧州議会は2015年の報告「人間の臓器売買」の中で、イスラエルを臓器取引の中心国のひとつに挙げ、イスラエルは臓器の輸入国であり消費国でもあると述べた。同報告は、臓器取引対策を目的とした2008年の「イスタンブール宣言」にイスラエルが署名することを拒否したことにも触れている。

イスラエルでおこなわれる臓器移植への関心は、インターネット検索やオンライン活動を通じて追跡することができる。イスラエルの保健省公式サイトには、臓器移植をおこなう部署を持つ病院のリストがある。私の調査によると、2023年10月7日にガザ攻撃が始まって以降、イスラエルの病院がおこなう臓器移植に関する検索数がアメリカで急上昇した。2023年10月のグーグル・トレンドによると、「イスラエルにある腎臓」などのフレーズ検索が上昇、シェバ医療センター、ソロカ医療センター、ラムバム病院は検索スコアが0から100に上昇し、一方で臓器移植の部署がないリス産科病院やアッスータ病院は検索数が増えず、グーグル・トレンドのスコアはゼロだった。

イスラエルは2008年、臓器提供と移植をより厳しく規制する臓器移植法を制定した。しかし、ガザへの攻撃と合わせて臓器摘出の申し立ては続いており、臓器搾取の懸念は深まるばかりだ。

←臓器を奪われた遺体

イスラエルによるパレスチナ人の臓器摘出の裏付けは一筋縄ではいかない。まず犯罪を立証する動かぬ証拠が必要だが、イスラエル軍の軍事占領により独立調査は不可能に近い。法的な妨害も持続している。しかしこのようなイスラエルの行為が国際法違反を構成することは明白だ。ジュネーブ第四条約は遺体の略奪を禁止し、占領下の民間人保護を義務付けている。同条約16条は死者の冒涜と遺体の切断をはっきりと禁じている。しかしながらイスラエルは同条約がガザと西岸地区に適用されることを認めていない。

こうした申し立てが立証されたなら、イスラエル政府はさらなる戦争犯罪と人道に対する罪で訴追されなければならない。国際刑事裁判所(ICC)には、この種の犯罪を捜査する権限がある。イスラエルはICCに加盟していないがパレスチナはICCに加盟している。パレスチナの加盟国としての立場はイスラエルを訴追する法的な根拠となりうる。遺体の冒涜、切断、臓器窃盗の報告は今も続いている。この事実は深刻な人道問題への懸念だけでなく、紛争地において説明責任と公正な裁きが欠如していることを強調するものだ。

真実をあばく時が来た。被害者に正義を与え、これ以上の国際人道法違反を防ぐために徹底調査をする時が。

(この記事は最初トルコ国営のアナドル通信社の意見記事として掲載されました)

即時停戦を求めて！アハリー・アラブ病院の活動を引き続きお支えください！

■郵便振替：00150-7-601525

■ゆうちょ銀行　019（ゼロイチキュウ）支店　当座 0601525

口座名：アハリー・アラブ病院を支援する会

※領収書が必要な方は通信欄にご記入ください。MAIL：ayyam_ahli@yahoo.co.jp

※本紙翻訳担当：桜井まり子＆真下弥生（支援する会スタッフ）